

Shadows on the Rock における 理想郷の創造

志 水 智 子

Abstract

In Willa Cather's *Shadows on the Rock* (1931), the author describes a French father and a daughter who come to Canada under the order of Count Frontenac, a governor general in 1697. Auclair, the father, leads a passive life and can be seen to embody a kind of typically successful life as a pioneer immigrants as devised by Cather. At the end of this story, Auclair is completely satisfied with his unchanging life in Canada though he is a different type of immigrant from Alexandra in *O! Pioneers* (1913), in which Cather describes an energetic immigrant who positively grabs a success for herself. This essay aims to explore changing forms of success in Cather's novels and the possibility of "passive success" for immigrants.

While Auclair and Cécile hate the French social system and feel lucky for living in a peaceful place far from France, they cannot put up with the bare Canadian wilderness and live only in Quebec, the city rich with French culture. They are protected by Canadian geographical features far from Europe as well as by French imperialistic power. We can see how Cather tries to construct lives as steady as possible for immigrants through the representation of Auclair's life.

The pioneers in this novel, Count Frontenac, Mother Catherine de Saint-Augustin, Jeanne Le Ber, must lead hard lives and protect general people like Auclair. They sacrifice themselves for others and transcend the question of whether they are happy or not. Through Auclair, Cather shows a realistic happiness for general immigrants.

序

Willa Cather の *Shadows on the Rock* (1931) は1697年のフランス領ケベックを舞台としている。Cather がこれ以前の作品において描いた旧大陸と新大陸の文化融合、旧大陸から新大陸へ移民した人々の生活というモチーフは依然として繰り返されるものの、この作品においてアメリカとアメリカ人が描かれていないことの意味は大きい。アメリカに作品の舞台がとられないことで、多民族国家に分け入る移民が自らの民族的アイデンティティーを問い直すという状況は生じない。この作品における新世界への移民たちは「フランス人」という民族的アイデンティティーを始めから持つ。

Cather は1925年にカナダのグランド・マナン島に別荘を持ち、カナダの風景や歴史に親しむとともにそこで執筆するようになる。Marion Marsh Brown and Ruth Crone が、“Grand Manan drew Willa Cather back again and again—every summer, in fact, until the war years and her own failing health conspired against their union.” (52) と述べるようにグランド・マナンは Cather に安らぎを与える場所で、特に1928年の父の死や母の病気の悪化以降はグランド・マナンに滞在することが Cather にとって癒しとなった。(Murphy 332) 彼女が心の平安を求める気持ちや父への思慕が、この作品に描かれるようなカナダの風景や、主人公 Auclair の変化に乏しいが安定した生活、父娘の愛に投影されていると考えることもできる。フランス領ケベックの総督 Count Frontenac の指示でカナダに移住し、その庇護の下で生きる Auclair は、“He was clearly not a man of action” (12)¹と描かれる。彼の生き方は非常に受動的で無欲であり、彼自らの判断で変化をもたらすような行動を起こすことはほとんどない。それ故この作品は Cather の作品の中で力強さに欠けるものと評されることもある²。しかし Cather の安定を求める時期が生んだ消極的な作品という判断にとどまらなければ、この作品は開拓移民の人生の「成功」というものに対する Cather の意識の変化や新

たな試みが読み取れるものと言える。

作品の結末において、変化のない土地と生活にある Auclair は、自らの幸福に完全に満足している。これより18年前に出版された Cather の *O! Pioneers* (1913) では、主人公 Alexandra はたぐいまれな才覚と熱意で、不毛の土地を豊かな農園に変える女傑であり、多くの失意に見舞われた移民たちの中で選ばれた成功者であると言える。ところが自ら動くことのない Auclair が最終的に感じる幸福は、Alexandra のそれと比べて劣ってはいない。すると Cather は数少ない選ばれし者の、甚大な努力によって導かれる成功に匹敵する、平凡な人々の人生の成功の形というものを模索し、この作品において描き出していると考えられる。またその過程において我々は、成功を目指して懸命に「動く」ことと、変化を恐れて「静か」に与えられた状況に甘んじることのそれぞれの意味の変遷にも気づくのである。そしてこのような Cather の現実観、人生観のダイナミズムを内包する作品として *Shadows on the Rock* を論じることで新たな Cather 文学の局面を見出すことができよう。そこで本稿では、Cather がいかにそれまで否定的にとらえていた概念に肯定的価値を与え、肯定的に描き続けてきた概念に否定的な意味を見出していったのかを検証しつつ、この作品において Cather が提示する人生の成功の形について考察していきたい。

I 閉ざされた世界と静的環境がもたらすもの

物語は10月のケベックの街からフランスの船が出港する様子を薬剤師の Auclair が見守る場面から始まる。この後八か月間ヨーロッパとこの町の交流は途絶える。移動できない、動きのない人々の生活が、孤立した空間で繰り返される様子は、通常閉塞感を表すが、この作品の中ではパラドキシカルな意味を備える。ケベックは岩山に作られた堅固な要塞のような都市で、冬期には“entirely cut off from Europe, from the world” (7) と描かれるように孤立し、フランスの物資も手紙も母国の社会情勢に関する情報も一切入っ

てはこない。しかし Auclair をはじめ、フランスでの生活習慣を続けることを好む人々は、冬に備えてたっぷりと食料を保存することにも労を厭わず、カナダにいてもフランスでの生活習慣を守りながら豊かな食生活を送ることができる。ケベックの町は未開の自然やインディアンの襲撃といった脅威にさらされる危険がなく、物心ともに充実したフランス文化に包まれた、移植された小さな文明国家である。同時にそれは、これから大きな社会変動を迎えるフランス社会の影響からも距離を置いた、守られた要塞のような有利な空間となっている。

ケベックの町はフランスの帝国主義によって設立されたことは確かである。しかしフランス王から総督を任せられた Count Frontenac は、王からその功績を顧みられない。ケベックは王の影響を受けにくい総督によって守られることになる。Count Frontenac とは違い、王との交流がより多く、聖職者というよりは宮廷人のように見える Saint-Vallier 司教はケベックの人々には人気がない。というのもフランスの宮廷で必要な駆け引きの知恵はケベックでは求められないからである。Count Frontenac の私欲のなさが、ケベックを、フランスにおいては避けられない宮廷における権力闘争の影響から離している。

また、フランスの法律がいかに人を苦しめる悪であるかを Auclair は All Saints' Day に、娘 Cécile に Bichet 老人のエピソードを語りながら教える。Bichet 老人が理不尽にも絞首刑になった話によって Auclair は、フランスでは法律は人ではなく財産を守ることにしか役立たないと語る。このような Auclair のフランスの法に対する不信、ひいてはその影響から離れたカナダで暮らすことの幸福の再確認は、Auclair 家の手伝いをする Blinker が、フランスのルアンで監獄の拷問係であった頃、冤罪の女性を絞首刑に追い込むことになった過去に今も悩まされる心境を告白するシーンにおいても繰り返し読み取ることができる。Blinker のトラウマとなるフランスの法律という悪の呪縛の様子を介して、Auclair のフランスの社会制度に対する批判が浮

き彫りにされる。そのような弱者を追い詰める法律からも、宮廷風の駆け引きからも距離を置いた「守られた」場所でフランスの社会悪を認め合うことができることが、ケベックの人々にカナダへの愛着心を育て、幸福感をもたらす。

フランス社会と政治の影響から離れていることは Auclair 父娘にとって善であり幸運と感じられるが、フランス式の住環境や生活習慣から離れすぎることは彼らにとって不快なことである。繊細でたくましさに欠ける Auclair と違い、未開地のインディアン制圧をやり遂げた Count Frontenac でさえ、日々の生活に“lavender-water” (69) がないと耐えられない。Auclair はフランス式に、一日の食事のうち夕食に時間をかけることで自分を“a civilized man and a Frenchman” (23) と再認識することを好む。また Auclair の亡き妻は、夫が“order and regularity” (32) に依拠した生活を好むと考え、自分たちフランス人を、“the most civilized people” (32) と考えて、カナダに来ても揺るがないフランスの生活の流儀を娘に伝えている。Auclair 一家の居住地は地理的に大きく動くが、実質的な生活状況はフランスにいた時から動いていないのである。彼らのフランス帝国主義的かつ、西欧中心主義的な思考は、新天地の“wilderness”に脅かされない限り揺らぐことなく安泰である。“wilderness”の動的なエネルギーは、ケベックに住むフランス人たちの世界観と民族的アイデンティティーに対抗する要素となる³。

Auclair 家の娘 Cécile の“wilderness”への恐怖が現れる例が、父の友人 Pierre Charron に連れられてオルレアン島に小旅行を果たす場面である。作物豊かなオルレアン島は、フランス然として“wilderness”の入り込む余地のないケベックと違い、新世界の自然と野趣を象徴する。そこに住む Harnois 一家の生活もケベックでの人びとのそれよりも簡素で自然と一体化したものである。ところが Cécile はその家の不潔さに耐えられず、一家となじむこともなく、旅程を切り上げて Charron とともにケベックの家に

帰ってしまう。Cécile は、フランス流秩序によって整備されている自分の家を清潔で美しいと再確認するのである。カナダを愛している Cécile であっても、フランス文化に満ち、西欧中心的世界観とカトリシズムに支配されたケベックでの生活にしか適合できない。

Auclair は仕事やアイデンティティーを求めて移動し、変化しなければならない移民とは明らかに性質を異にする。カナダへの移民を希望する者は、仕事を持っていなかったり、または、律儀な仕事 “honest work” (22) を嫌う “many unserviceable man” (22) であることが多い。このような人々はイロコイ族の制圧に加わったり、毛皮貿易に携わるつもりで、いわば開拓地の状況に運命をゆだねて移住する。しかし Auclair は Count Frontenac の侍医であり薬剤師として総督に指名され同行するため、最初から身分も生活も保障されている。また、薬剤師という彼の職業は、彼がフランスで親世代から世襲した技術であり、職業人としても彼は開拓者とは言えない。そして薬剤師という職によって彼は Count Frontenac をはじめケベックの様々な階層の人々から利益を得ることができる。つまり彼はフランス社会が培った技術によって保護され、かつ、総督が象徴するフランス帝国主義の力に「守られる」移民なのである。

Cather は Auclair 父娘に対し、地理的に、社会的に、経済的に、衛生的に、宗教的に、危険から「守られ」、静的で安定した生活の条件を何重にも構築している。彼女が愛好するフランス文化が感じられるカナダのケベックには、変化していく現実のアメリカ社会と彼女自身の家族との絆とは違って、変化することのない歴史的文化的価値があった。このような Cather が心惹かれるフランス文化とカナダの魅力を融合できる町ケベックにおいて、Cather は、彼女が嫌う変化から「閉ざされ」、変化から免れた人生の構築を試みたのである。移民としてどれだけ「動き」、変化できるかではなく、どれほど動くことなく「静的」な安定を幸福として手に入れられるかを追求する Cather の試みを、Auclair の生活条件から読み取ることができるの

である。

II 受動性がもたらすもの

ケベックの町も Auclair 父娘も物質的精神的に苦難から免れ、「守られて」いるというイメージは作品全体を通して支配的である。そしてこの“guarded like a flame cupped by the hand in a storm” (Woollcott 388) とも表現される、Auclair の受動性が示唆するのは、「守る」立場にある人々の多大な貢献である。これらを享受できることが「守られる」立場の新天地における経済的精神的安定を高めており、この作品において受動的生き方というものに消極的で否定的な意味合いが与えられないことが特徴的である。

作品のタイトルである *Shadows on the Rock* が意味するものに注目してみると、“rock”については、宗教的象徴としての解釈、例えば、“the rock, Cap Diamant, inspires Christian awe as an alter of devotion” (Larsen 82) との解釈もあれば、Cather の作品に描かれる共通性に注目した、“The Rock... was the utmost expression of human need” (Trilling 11) との解釈もある。さらに、“the rock provides security” (Larsen 82) という安定を示唆する解釈も見られる。また、“shadows”については、“...identities, cultures, and cosmologies are all ‘shadows’...” (Stouck 17)、“The shadow... are those events, and those living men and women...” (Williams 381)、“The shadows are the people who strangely have picked this spot for the founding of a town...” (*New Mexico Quarterly* 389) といった解釈があり、岩の上でのすべての人間模様や文化、事象を指すと考えることもできる。本稿では“rock”をまずは岩の上の町、ケベックを表すものとして解釈したい。その上で、“shadows”が意味するものを検証するとこの町に住む人々が享受できる他者の恩恵というものが大きなテーマとなっていることが浮かび上がる。

万聖節の日に Cécile は一日中教会に滞在する。Cécile がこの日抱く思いは次のように描かれる。

On such solemn days all the stories of the rock came to life for Cecile ; the *shades* of the early martyrs and great missionaries drew close about her. (112)

Mother Catherine de Saint-Augustin and her story rose up before one ; at the Ursulines' Marie de l'Incarnation *overshadowed* the living. (113)

(イタリクスは筆者)

この箇所において、“shadow”の類義語である“shades”は、カナダにおける過去の殉教者や宗教的指導者の存在感を表す。

Cécile は、カナダで布教中にイロコイ族に捕らわれ、惨殺された Father Brébeuf、Father Lulemant、Father Jogues らを尊敬する。また彼らのように命の犠牲を伴う布教活動だけでなく、修道院及び社会奉仕活動に人並み外れた熱意をもってカナダに来た Mother Catherine de Saint-Augustin の貢献があったからこそケベックの町はカトリック文化が確固として根付き、後続の宗教的指導者が育ったのである。そして彼らよりも後に移民したケベックの人々は、本国フランスと変わらないどころかフランス以上に熱意にあふれるカトリック生活を享受できるのである。この様子は靴屋の母 Madame Pommier が、“... there is no other place in the world where the people are so devoted to the Holy Family as here in our own Canada. It is something very special to us.” (120) と表現する。すると“shadows”の意味の一つは、ケベックの人々の精神生活を守り、安堵感を与えてくれる過去の聖職者の存在感と考えられる。

また、天蓋のあるもの下が“shadow”となることから、“shadow”は悪天候から守られ、安心できる環境の場所を示唆する。だがタイトルは *Shadows under the Rock* ではなく、*Shadows on the Rock* となっており、“shadows”を作る物理的な遮蔽物は示されていない。覆いのない険しい岩の上では“shadows”は見られないという通念がパラドシカルに働き、それ

なのにケベックの町=Rock の上には奇跡的に守られた場所が存在することを示すタイトルになっているのである。Count Frontenac が死んだ時、Cécile は父について、“He had lived under the Count's *shadow*.” (299) (イタリクスは筆者) と感じる。ケベックの総督であり守護者である Count Frontenac の存在がこの町に“shadows”を作り出しているとも考えられる。

このように“shadows”とは過去の聖職者や開拓者、総督の貢献と、その恩恵が人々を覆い守る場所を意味していると考えることができる。Auclair はこのように守られたケベックの町における受益者となるにふさわしい受動的な人物である。彼は変化に対応する能力が低く、Count Frontenac とともにカナダに行くことを決めた時点では食べることも寝ることもできないほど不安になっており、彼には開拓者の素質は全く見られない。このため彼が持つ信念は彼を守ってくれるものへの忠誠心や従順さにおいて表れる。Auclair が唯一、自らの将来を自ら決断するのが、Count Frontenac によるフランス帰還のための世話を断り、Count とともにカナダに残ることを決意する場面である。この決断は確かに Auclair の信念としての忠誠心を表すが、それは庇護者の影から離れたとたん、たちまち自律性を失う脆弱な信念でしかない。つまりこの決断は Count の死後のカナダでの生活のすべてを覚悟し、準備をした上での開拓者精神に則ったものではないのである。実際彼は Count の死後、完全にフランスから切り離されたという思いと、自分が“helpless exiles in a strange land” (302) になったという気分押しつぶされ、自分のためにしっかりしてほしいと願う Cécile の声も耳に入らないほど落胆したままである。結局 Auclair は Count Frontenac という保護者に連れられた子どもの様な従属的な存在なのである。だがこのような子どもを思わせる彼の受動性が、彼の落胆を察して駆けつける Charron という次なる支援者を Auclair 家に招いている。Charron の性質は、“He had the good manners of the Old World, the dash and daring of the New.” (198) と描かれる。彼は旧世界の人々が持つ上品な流儀と、新世界を生きるに必要なたくましさを

併せ持った人物である。Charron は、フランス文化とカナダの文化が折衷され、変化に対して耐性の弱い Auclair にとっても住みよい町であるケベックと同じ属性を備えていると言える。Auclair は Count Frontenac に代わる守護者にすかさず従属し、彼に“wilderness”の未知の動的エネルギーを遮蔽する役割を担ってもらうことで、秩序ある変化しない日常を取り戻すのである。

実際の子どもとして登場するのが、Cécile と港に住む女性の息子であり Cécile が目をかける少年 Jacques である。この二人は絶対的な存在に保護され服従することが心のよりどころとなる子供時代の安定を象徴する存在である。彼らは自ら生活を切り開く力はなく、親に定められた場所で生きるより選択肢はないが、与えられた立場に最大限の幸せを見出す能力がある。彼らは守られたケベックの町のさらに守られた中核的存在を象徴する。Cécile がケベックの町に対して抱く気持ちは、“She felt a peculiar sense of security... powerful protection.” (124) と描かれ、この地やそこに住む大人たちへの深い信頼感が読み取れる⁴。

Cécile は、母の死後父を助けて一家の主婦の役割を担うが、まだ11歳で登場する。遊ぶ時間がないのではないかと気遣う Count Frontenac の質問に対し、Cécile は、“Oh, everything we do, my father and I, is a kind of play” (70) と答え、与えられた状況を楽しむという受動的人生の熟練者のような見識を披露している。彼女の、与えられた幸福や知識の吸収能力は高い。また教会で Jacques が彼女に、聖人たちは子どもたちを好むのだろうかと尋ねた際に、彼女は、“Oh yes! And Our Lord loves children. Because He was a child Himself, you know.” (80) と答える。この言葉から、幼な子キリストが絶対的安定性をもって愛され、守られる姿が、Cécile が考えるすべての子どものイメージであることが読み取れる。それゆえ敬虔な彼女は受動的幸福を疑いなく受け止める能力も高い。

Jacques は父を知らず、港の店の評判の悪い女性である Toinette の息子

である。しかし彼は Sandra Seltzer が “Auclair and Cécile’s surrogate son” (179) と表現するように母不在時の保護者を持つ。彼は Cécile からカトリック信仰の習慣を学び、Cécile の注意と Count の財力のおかげで靴屋の Pommier に彼の足の成長に合った新しい靴を作ってもらう。また、四歳の冬、彼を残して夜遊びに出た母の留守中、Jacques は迷子になり、寒さの中町をさまようという危機にあった。その時、彼を保護し、暖を取らせてくれたのが Laval 司教であった。母の愚かな行為が引き起こした Jacques の生命の危機は、ケベックの宗教的指導者であり人々の精神的守護者である Laval 司教によって回避され、彼は庇護されたのである。このエピソードは、この作品において個人がケベックという町によって守られているイメージをより強める効果をもたらす。それゆえ Jacques はこの日迷子になって Laval 司教に出会った思い出を、恐怖としてではなく、“something pleasant” (84) として記憶している。必ず何かに守られる Jacques の姿には、Cather が子供時代の受動性に対して抱く安心感が投影されているとも考えられる。

このように子供の従属性を髣髴とさせる Auclair、受動的幸福を信じる能力の高い Cécile、そして様々な保護者に守られる Jacques らは、ケベックの “shadows” である他者の恩恵の受信力が高い。“shadows” の下から逸脱することなく、自分に与えられた安定性に最大限の幸福を見出すことは、移民が精神的成功者となるための一つの方法であることが Auclair らの受動的能力によって示唆されていると考えられるのである。

Ⅲ 「開拓者たち」の人生

受動的で庇護される人々に “shadow” を提供する人々、つまり後進のために身を挺して試練の荒野を「開拓」する人々の人生もまたこの作品においては描かれる。しかし Cather の初期の作品においては主役となる、「開拓者」たちがこの作品においては Auclair の背後に配置され、主役として描かれる場合とは違う意味を備える。最後に彼ら「開拓者」たちの人生について考察

したい。

この作品に描かれるケベックの過去の殉教者である Father Brébeuf、Father Lalemant、Father Jogues や、現在の司祭、修道女、さらには総督 Count Frontenac はすべて実在の人物であり、その献身的な働きによってカナダの歴史に名を残している。一方、Cather はケベックに移民した薬剤師の手記を読んだことをきっかけとしてこの作品を着想したため、Auclair にもモデルはいたが、Auclair 父娘や Jacques は名もない一般的な市民として描かれる。Father Brébeuf らの殉教者は Cécile のような後の世代の移民たちに強い印象を与え、その偉業で人々に讃えられる存在ではあるが、志半ばでインディアンに惨殺され命を奪われる。彼らは「精神的開拓者」としてわずかしか目的を達成できない現実の宣教師なのである。

また、若くしてカナダでの修道院活動に生命を捧げたいと熱烈に願い、司教に嘆願書を出して願いが認められた修道女 Mother Catherine de Saint-Augustin は、修道院と社会奉仕の仕事によって他者のために人生を使い尽くすことに迷いがなく、30代で死ぬ。モンリオールの裕福な商人の娘 Jeanne Le Ber は、家族や求婚者を悲しませながらも教会に隠遁する人生を選ぶ。彼女の決意や生き方は家族には理解され難いものであるが、Jeanne Le Ber は冷徹なまでに迷いなく孤独にただひたすら他者のために祈り奉仕する生活が続けるのである。Laval 司教はこのような Jeanne Le Ber の果たす役割を、“All the sinners of Ville-Marie may yet be saved by the prayers of that devoted girl” (202) と認めている。

このように登場する殉教者や伝説の修道女は、あまりに世俗性や私欲がなく、生身の人間というよりは、他者とカトリシズムに身を挺するのみの崇高な存在である。彼らには *Death Comes for the Archbishop* (1927) において描かれる Latour 神父のような人間的な楽しみを持つ様子は全く見られない。人間臭さが無い彼らには、彼らが精神的開拓者として成功者であるかどうかといった問題は問われる余地もなく、彼らは個人的な成功・失敗、幸・不幸、

といった問題を超越して新天地の守護者であり続ける。

一方、より世俗的な立場の開拓者は総督 Count Frontenac である。Gary Brienzo は彼を、“a symbol of strength and power” (73) と述べる。彼は軍人としての名誉は重んじるが物欲は少ない人物である。王から彼への物質的な褒賞は少なく、彼が新天地でイロコイ族の制圧をやり遂げた後も、いっこうに王からの本国召還命令が下らない。また彼を顧みない妻はフランスに残って生活をしており、子はすでに無く、Count は孤独に禁欲的にケベックで総督としての務めを果たす。王からも親族からも顧みられないまま一人で人生を全うすることを是認しているはずの Count は、フランスに帰れないまま死を迎える直前に少年時代の夢を見る。その夢の中で、彼の人生において唯一本当に彼を愛し常に見守ってくれた女性である乳母の Noémi が現れる。Count の実の母は“cold woman” (282) であった。家族や女性の愛に恵まれず、他者の守護者となる使命を務め通す人生を受け入れていたはずの Count の、Noémi とともにいる農園に侵入しようとする大男を締め出そうと懸命になる夢は、大人時代の到来を阻止し、真に愛され守られる子供時代の安堵感を無意識に希求する気持ちを暗示する。Auclair の、さらにはケベックの守護者であるために個人的な孤独と愛情の渴望を甘受していた Count は、彼に守られる立場にある人々よりも個人としての幸福を手に入れていないと考えられる。

他者の守護者となる新世界における開拓者や精神的開拓者たちは、自己犠牲とひきかえに他者に恩恵をもたらす存在である。しかし彼らが個人としての幸福を手に入れているとは言い難い。Cather のこれまでの作品においては「開拓者」たちは物質的にも精神的にも成功することを目指し、それによって自他ともに幸福を手に入れようとする。O *Pioneers!* の Alexandra は豊かな大農園を築き、家族の守護者となるとともに自らも安定した地位を手に入れ、結末では結婚に至る。*The Songs of the Lark* (1915) の Thea は、音楽修行を見事やり遂げ、歌手としての成功を手に入れる。*My Ántonia*

(1918) の *Ántonia* は農場だけでなく、妻として母としての幸福を手に入れる。また *A Lost Lady* (1923) の Forrester 大尉は鉄道建設の仕事により多くの人々に貢献したが、彼自身も美しい妻との生活を手に入れ、けがと彼が頭取を務める銀行の倒産までは安定した裕福な生活を送る。さらに、*Death Comes for the Archbishop* の Latour 神父、Vaillant 神父らは、ニュー・メキシコの精神的開拓者として厳しい自然の中で宣教活動を行い、使命を達成するが、互いの友情や周囲の人々との絆を常に感じており孤独ではない。また二人の神父は音楽のある家庭との交流、庭造りの楽しみ、そしてニュー・メキシコの自然への愛によって心の平安と幸福に満たされているのである。このような「開拓者」たちの共通点は、彼らの成功が他者に恩恵をもたらすとともに彼ら自身の幸福につながっているということである。ところが *Shadows on the Rock* における「開拓者」たちの自らの人間的な幸、不幸を超越した自己犠牲から、Cather がそれまで描き続けた「成功する開拓者」像に疑問を呈している様子が読み取れる。

カナダ初期の殉教者である Noël Chabanel を尊敬し、カナダでのカトリック活動に身を捧げたいと願い、フランスに帰国する機会を放棄するという Hector 神父に対して、Auclair は、“a waste of rare qualities” (180) であると思う。この Auclair の気持ちは、この作品における自らは幸福を手にしない「開拓者」たちの人生に当てはまる。ケベックの守護者となる「開拓者」たちの人生が示すように、新天地における開拓者が自他ともに成功と幸福を手にする率は現実として高くはない。すると移民の個人の人生における成功や幸福というものは、一握りの並外れた力を持つ「開拓者」ではなく、彼らによって拓かれた恩恵を享受できる、名もない一般的な人々の人生において、より見出されるのではないだろうか。受動的な Auclair のつかむ幸福によって、Cather は移民が手にするより現実的な成功というもの一つの形を描き出していると考えられるのである。

結 び

与えられた新天地と運命に積極的利点を見出し、そこから未来の文化を築くこともまた人生における成功と幸福を手に入れる能力と言え、Auclair は受動的人物であってもこの能力を持つ。Laura Winters は Cather 作品における人物たちの能力を、“Almost every major Cather character must, at some point, come to terms with the dilemma of exile from a beloved landscape. To manage the condition of exile, Cather’s characters must transform mundane…spaces into sacred places… These sacred places bring peace: an aura of resolution and rightness pervades the very air.” (11-12) と述べる。Winters が述べるように、与えられた生きる場を「聖域」へと変える能力は、ケベックの利点を発見しそこで未来を築いていく Auclair に備わるものである。Cather の愛するフランス文化とカナダの自然が理想的に融合された、“the very center of her pastoral imagination” (Stouck 11) たるケベックの町で Auclair らの移民たちは、ニューフランスに移民し、そのエスニック・マジョリティーとなる。さらに彼らは、フランスの社会悪や旧弊から解放された理想的な「カナダ人」である次世代を生み出していくことに移民としてのアイデンティティーを見出すことで、彼らにとっての理想郷を確保しているのである。子供たちは受動的安定を象徴するのみならず、Auclair の未来の救い手、守り手として働く⁵。前作である *Death Comes for the Archbishop* とは違い、大国の帝国主義的な威力によって支配され、サバルタン化される新大陸の民族との邂逅が全く描かれないこの作品において、いかに西欧社会の国家的開拓能力がいかにその配下にある移民たちに単一民族の世界観に基づく理想郷という共同幻想の創造を強いていくかという過程もまた描き出されるのである。

この作品において、新天地における開拓移民の活動と可能性を阻害する要素であると通常考えられる、土地の閉鎖性や動的エネルギーの欠乏という状

態には肯定的な価値観が見出されている。すなわちケベックの閉鎖性と静的状態には安全さと庇護される安心感という意味が、母国フランスとの隔絶には因習悪と社会混乱からの解放という意味が、単一民族のコミュニティーには確立された民族的宗教的アイデンティティーという意味が与えられる。さらに Auclair の受動性には守護者のもたらす恩恵を自らの人生の成功と幸福へと結びつける能力という意味が、“shadows” には暗さではなく守られた安全地帯という意味が与えられるのである。Cather は、その初期の作品においては、積極的努力と打たれ強い開拓精神を登場人物たちの自己実現のための要素ととらえ、その逆の消極的、静的、受動的状態を人物たちの人生における行き詰まり、停滞の表象として描き出す傾向があった。ところがこの作品において Cather はかつて否定的にとらえた概念に肯定的価値を、肯定的にとらえた概念に否定的な意味を与えている。このような楽観的価値観の変貌とでもいべき価値観の変化には、両親に支えられた子供時代の安寧と限られた世界観の恩恵を振り返るように、人生の開拓者たちを守り育んだ旧世界の文化の価値を見直そうとする Cather の意識が見え隠れする。受動的かつ限られた世界観の中で、揺るがぬ独自の人生の成功をつかむ一つの例が、この作品において追求されていると言えよう。

註

1. Willa Cather, *Shadows on the Rock*. Ed. Frederick M. Link (Lincoln: University of Nebraska Press, 2005) 12. 以下、本稿中の *Shadows on the Rock* からの引用はすべてこの版に拠る。
2. 例えば “not... a novel of action” (Murray 355)、 “somewhat thin” (Doren 360)、 “There is no conflict in the book” (Chamberlain 362)、 “a quiet, restrained, finished piece of work” (*World-Herald* 364)、 “a very delicate and very dull book” (Arvin 369)、 “readable but not very important” (Cron 379)、 “not a book for those who want excitement” (Squire 396) といったこの作品に対する消極的評価がみられる。
3. この作品における辺境の地に対する Cather の筆致の変化については John H.

Randall III も、“One indication of Willa Cather’s resistance to change is her new attitude toward the wild land. The frontier has now become an enemy.” (314) と指摘している。

4. Gary Brienza もまた、“At the heart of *Shadows on the Rock* is the security of Cécile wrapped within ‘layers and layers of shelter’” (50) と述べ、守られるセシルの姿を指摘する。また、John Murphy と David Stouck は、“The loss of her parents also made Cather’s text resonate with recollections of childhood, with those best years in Red Cloud, Nebraska…” (338) と述べ、Cather の子ども時代への憧れを指摘する。
5. この点について Mona Pers も、“In *Shadows on the Rock* (1931), the child’s role as redeemer of mankind is secured The child is the Savior.” (60) と指摘する。

Works Cited

- Arvin, Newton. “Quebec, Nebraska and Pittsburgh,” *New Republic*, 67 (12 August 1931), 345–6.
- Brienza, Gary. *Willa Cather’s Transforming Vision: New France and the American Northeast*. London and Toronto: Associated University Presses, 1994.
- Brown, Marion Marsh and Ruth Crone. *Only One Point of the Compass: Willa Cather in the Northeast*. U.S.A: Archer Editions Press, 1980.
- Cather, Willa. *A Lost Lady*. London: Virago Press, 2006.
- . *Death Comes for the Archbishop*. London: Virago Press, 2007.
- . *My Ántonia*. New York: Oxford University Press, 2008.
- . *O Pioneers!*. New York: W.W. Norton & Company, 2008.
- . *Shadows on the Rock*. Ed. Frederick M. Link. Lincoln: University of Nebraska Press, 2005.
- . *The Songs of the Lark*. New York: Signet Classics, 2007.
- Chamberlain, John. “Willa Cather’s Tale of Canada,” *New York Times Book Review*, 2 (August 1931), 1.
- Cron, Helen Cowles Le. “Shadows on the Rock is not a Poor Book; It Merely Shows that Genius can be a Trifle Dull,” *Des Moines Register*, (27 September 1931), section 10A, 4.
- Larsen, Donald Edward. *A Study of Willa Cather’s Change of Historical and*

- Religious Emphasis in Novels after 1922*. Ann Arbor : University Microfilms International, 1987.
- Murphy, John J. and David Stouck. "Historical Essay." *Shadows on the Rock*. Ed. Frederick M. Link. Lincoln : University of Nebraska Press, 2005.
- Murray, John. "Promethean Fires," *Canadian Bookman*, 13 (August 1931), 167-8.
- Seltzer, Sandra. *The Family in the Novels of Willa Cather*. Ann Arbor : University Microfilms International, 1987.
- Stouck, David. "Willa Cather's Canada." *Cather Studies*. Eds. Robert Thacker and Michael A. Peterman. Lincoln and London : University of Nebraska Press, 1999.
- Trilling, Lionel. "Willa Cather." *Willa Cather*. Ed. Harold Bloom. New York : Chelsea House Publishers, 1985.
- Pers, Mona. *Willa Cather's Children*. Uppsala : Uppsala Offset Center, 1975.
- Randall III, John H. *The Landscape and the Looking Glass : Willa Cather's Search for Value*. Boston : Houghton Mifflin Company, 1960.
- Williams, Michael. "Quebec in Pastel," *Commonweal*, 14 (30 September 1931), 528.
- Winters, Laura. *Willa Cather : Landscape and Exile*. London and Toronto : Associated University Presses, 1993.
- Anonymous. *World-Herald* (Omaha), 2 August 1931.
- Anonymous. "That Final Sacrifice," *New Mexico Quarterly*, 1 (November 1931), 419-21.